

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

龜田次郎

一

本居宣長翁の國語學上の著述中、一は音韻字音で、一はてにをはの研究で、共に國語學史上一劃期をしてゐる「字音假字用格」、「詞の玉の緒」二書の初刊及其後刊本についで、聊鄙見を述べよう。

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

「字音假字用格」二卷は、伴信友翁の「鈴屋翁略年譜」安永四年の條に、「正月十日、字音假字用格成、五年刻成」とあつて、其刊行の月日を記して居らぬ。赤堀又次郎氏の「國語學書目解題」には、

安永四年正月自序、安永五年春刊

とあつて、また刊行月日を記して無い。然らば其初刊の年月は何時であるか。自分は安永五年正月とおもふのである。此書は上記「鈴屋翁略年譜」所載や、刊本に見える安永四年正月十日の自序や、同年三月門人須賀直見の序などから考へると、安永四年正月以前に成功して、それを翌五年正月に初刊したと考へる。現に自分の所藏してゐる「字音假字用格」の本文の終末に、「漢字三音考」刷出とあり、又奥付には、

安永五年丙申正月發行

日本橋壹丁目

江戸書林

須原屋茂兵衛

松坂本町

田丸屋正藏

勢州書林

同所日野町

柏屋兵助

寺町通松原上ル町

菊屋七良兵衛

寺町通五條上ル町

正本屋九兵衛

京都書林

寺町通錦小路上ル町

錢屋利兵衛

と明記してある。これが初刊本であるとおもふ。然るに此書の刊本で、本文の終末に、

安永五年

勢州松坂日野町

柏屋興助

同所本町

丙申春發行

書

林

田丸屋正藏

京都寺町四條上ル町

錢屋利兵衛

と印刷して、奥付の無いものがある。これが普通世に流布してゐる刊本である。これは再刊本の様である。板が少し磨滅して不鮮明な所があり、其他用紙や製本の上から見ても、後刷であることがわかるのである。〔國語學書目解題〕や、其他に、安永五年

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

春刊とあるのは、この後刷本の事で、普通流布本卷末の所載から、斯く唱へられた様である。又この再刊本は後年又々刊行せられ、本文終末も其儘の印刷で、奥付には「本居先生著述書之内板行出来」松坂
皇都「文海
堂」と記して、本書字音かなづかひや、初刊本に嗣出廣告の「漢字三音考」など、十二部を上下二段に廣告して、

寛政十一年己未初秋

勢州松坂日野町

柏屋兵助

京都三條通柳馬場東へ入ル所

錢屋利兵衛

とした刊本もある。又四十有餘年の後天保十三年壬寅春三月には、山崎美成が校正し、跋文を添へ、原本の須賀直見の序文や、又本書中三行分生圖、輕重等第圖、及字音總論中の二圖などを省いて、美濃紙半折本に小刻して、東都書肆大傳馬町二丁目丁子屋平兵衛から刊行し、更に二十年の後文久二年壬戌には、この小刻本は東都書肆芝三田一丁目文岳堂萬屋彌三郎から求板再刻されたが、この再刻の際には、新に「紐鏡」をも合刻してある。尙明治年間に及んでは、國語國文が復興した廿六年頃、大阪から洋紙四六判活版本で翻刻されたのである。この洋紙活版本は、後數版を重ねた様である。かくの如く「字音假字用格」は、數回刊行されたが、安永五年正月發行本が、初刊本で、安永五

年春發行とある普通流布本は再刊以後のものである。

二

次に詞の玉の緒七卷は、鈴屋翁略年譜〔安永八年の條下に、〇十二月詞玉緒成（後年刻）とあつて、成功年月は明記してあるが、刊行年月を記してゐない。又各種の國語學史にも、皆其成功年月のみを明記して、刊行年月を記して無い。只國語學書目解題には、安永八年十二月成 寛政四年刊 文政十二年再刊 明治十七、八年刊とし、福井久藏氏の『日本文法史』には、

こは安永八年の出版にかゝる

とあるのみである。此兩氏の所説果して其當を得たものであるか。自分は聊異見を有してゐる。從來此詞の玉の緒の初刊年代については、屢他人から問合されて、其都度答へた所である。今茲に自分の鄙見を述べる。

〔詞の玉の緒〕は、本居翁が、先きに明和八年十月に物したてにをば紐鏡一鋪の詳論註解である。此の事は兩書の序文にも見えてゐるから、詳述するに及ばないのである。〔詞の玉の緒〕の出來たのは、安永八年末である。これも本書の序文に見えてゐる。然

あるとおもふ。

天明五年五月の初刊本は、其刊行部数が少かつたが鈴屋翁の學風が漸次世に廣かつたため、従うて本書の需用も頓に加はつて來て、更に増刊を要する様になり、茲に寛政四年に至つて補刻せられたのである。初刊天明五年後七年である。即ち

寛政四年補刻校

同	京	錢
	都	屋
		利
		兵
		衛
同	同	菱
		屋
		孫
		兵
		衛
同	同	武
		村
		嘉
		兵
		衛
同	同	勝
		村
		治
		右
		衛
		門
同	同	林
		伊
		兵
		衛
勢	同	柏
州		屋
		兵
		助
同	同	藪
		屋
		勘
		兵
		衛

の奥付あるものである。この補刻本は刊行部数が割合に多かつたと見えて、今日多數に流布してゐる。赤堀氏はこの補刻本を初刊の如く記されたのである。初刊本で無い事は、奥付明記の補刻校の三字これを証とすべきである。この寛政四年本は

再板本といふべきものである。

文化文政の交になつて、鈴門の學風は、其實子春庭養子大平三代傳承の上に、歿後の門人平田篤胤翁の手に依つて、愈益隆盛を極め天下を風靡する様になつたので、詞の玉の緒の需用は激増して來た。それで初補兩刻本の板本は全く磨滅したので、文政十二年に及んで新に板を起して出板した。これが第三の刊本である。初刊天明五年を去る四十四年、第二補刻寛政四年を去る三十七年である。この文政十二年の刊本は、その奥付に、

文政十二己丑年再刻

東都

須原屋茂兵衛

三都

山城屋佐兵衛

岡田屋嘉七

浪華

河内屋新治郎

發兌

堺屋新兵衛

書 賈

京 都

菱 屋 孫 兵 衛

勝 村 治 右 衛 門

とあるのがそれである。この第三再刻本は今日澤山世上に流布して居るのである。この第三の再刻本は、前板の第二補刻本と相對照したならば、其印刷の點に於て、非常に鮮明である。それで改板した事が一見して明かるのである。只茲に注意すべきは、この「詞の玉の緒」の題箋が、全篇七卷それ〴〵字體をかへてある。これは後世の各板同一であるが特に注目すべき點は、初刊補刻の兩板は、毫も差異は無いが、この第三再刻の文政本以後のものは、第一卷丈の題箋に「再板」の二字を其右側に印刷してゐる事である。

文政十二年本について更に板を重ねて居る。これは鈴門の學派は愈益天下に擴つたから、其流を汲む人々に依つて、廣く繙讀された爲めである。表裝や用紙や印刷などの上から見て、嘉永以後幕末迄に刊行されたものがある。即ち自分の推測では嘉永頃の刊行とおもはれるもので、次の様なものがある。これは刊行の年月を記してゐないのである。それは奥付に、

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

藝

文

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 淺草茅町

須原屋伊八

同 中橋廣小路

西宮彌兵衛

大阪心齋橋通南久寶寺町

堺屋新兵衛

とあるものである。これを嘉永頃の刊行と推定したのは、京大研究室所藏本に、此奥付のある刊本で、八木立禮翁の書入本があるからである。翁は安政三年に歿してゐるから、此刊本の表装や用紙や印刷などの上からと翁の歿年からとから推定したのである。

この自分が嘉永頃と推定した刊本の後刊に、次のものがある。これは幕末の刊行

とおもはれる。矢張刊行年月は無いのである。奥付に、

發行

書林

江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 淺草茅町二丁目	須原屋伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 兩國横山町三丁目	和泉屋金右衛門
同 芝神 明前	岡田屋嘉七
京都三條通升屋町	出雲寺寛治郎
肥前佐賀白山町	紙屋惣右衛門
大阪南久寶寺町	榎並屋小兵衛
同 心齋橋備後町	近江屋平助
同 心齋橋通南久寶寺町	伊丹屋善兵衛

とあるものである。これを幕末刊行としたのは京大研究室所藏本に井面弘訓本を、某姓廣豐が繼承し、更に柳少將が慶應末年に謄寫し、また明治十三年に複寫したと記せる書本の刊本が、この奥付のものであるからの推定である。幕末迄の刊本は以上のものである。

明治年間になつては、また種々の刊本がある。「國語學書目解題」には明治十七、八年刊のものがあると記されてゐるが、自分は未見である。多分下記の十九年本か二十年本かの初板本であらうとおもふ。この十七、八年刊本に次いで、下の刊本がある。それは見返が黃唐紙で、

本店宣長大人著	詞の玉乃緒 全七冊	大阪 中川明善堂 岡島寶玉堂 梓
---------	-----------	---------------------

とあつて、奥付には、

明治十九年八月八日翻刻出版屆 同 年九月十五日刻成 定價 金壹圓	大阪府平民 原版人 三 木 佐 助 東區北久寶寺町四丁目
--	------------------------------------

翻刻人

大阪府平氏

中

川

勘

助

東區博愛町四丁目三拾三番屋敷

大阪府平民

翻刻人

岡

島

眞

七

東區本町四丁目百五拾九番屋敷

とある。

次いでまた下の刊本がある。其扉に、

本居宣長大人著

詞乃玉乃緒 全七冊

東都昇山房梓

とあつて、奥付には、

明治十七年十月二十日御届

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

藝文

同 十八年一月十二日出版
 同 廿六年八月三日購版

著述者 故人 本 居 宣 長

發行兼 東京府下南葛飾郡水元村千廿四番地
 印刷者 細 谷 米 吉

發行所 東京市日本橋區大傳馬町十三番地
 山 田 藤 助

とある。只本書に於て、吾々の注意すべき事は、この刊本では、從來の刊本に比して、各丁其行數を多くして居る點である。従うて各卷其丁數は、減少してゐるのである。これは新に改版したものの様である。當代に於て改版した所は、特に異様におもはれるのである。

以上は何れも和装木板本ばかりである。然るにこの前後から洋装活版本が現れて來たのである。この種の最初のもは、四六版大和綴一冊本で、大阪版である。奥付には、

明治二十五年一月廿一日印刷
明治二十五年一月廿二日出版

故人

著者 本居宣長

大阪市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷
圖書出版會社名代人

發行者 梅原忠藏

大阪市東區德井町二丁目六十八番屋敷

印刷者 前野茂久次

大阪市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷

發兌書肆 圖書出版會社

とある。

これに續いて同じく四六版洋裝假綴上下二冊本がまた大阪で刊行された。其下
卷の奥付には、

明治二十七年三月二日印刷
明治二十七年三月六日出版

著作者 故人 本居宣長

字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて

藝文

大阪市東區淡路町三丁目三十八番屋敷

發行者 金 川 善 兵 衛

大阪市南區鹽町三丁目九十九番屋敷

印刷者 福 田 耕 造

發兌所 大阪市東區淡路町三丁目 金 川 書 店

とある。以上二種の活版本は、當時國語國文が復興したので、大阪では各種の國語國文に關した古典が活版本で刊行されたのである。上記の「字音假字用格」の出版も、矢張この趨勢のためである。此二種の「詞の玉の緒」活版本も、爾後數版を重ねたのである。尙明治三十四年から三十六年迄の間に「出た」本居全集所收の本書の活版本もあるが、これは已に世人熟知のものである。

以上述べた所は、本書初刊以下の刊本である。遺漏もあらうが主要のものは示した積である。本篇の趣旨は初刊本についてあるが、論定のために其續刻本に迄及んだのである。

自分が以上叙述した所で、「字音假字用格」「詞の玉の緒」兩書の初刊本の年代を明かにしたとおもふ。其論定から再刻以下に及んだのは、聊蛇足の様であるが、また兩書の後世における影響を説いた所もあると考へる。冗長の譏は甘受する次第である。一は音韻字音の研究、殊に於乎所屬について、確立の見を示し、一はてにをは研究、殊に其係結照應の法則について、大成の功を遂げて、共に後世に範を垂れ、我國語學史上一劃期をなした名著である。從來斯る二名著が共に其初刊年代の不明であつた事は、斯學のために遺憾の至といふべきである。今自分は各種の異本を蒐集對照して、これが闡明に勉めたのである。本誌編輯者から投稿を求められたので、此の蕪文を呈して其責を果した譯である。聊斯學研究の士に資する所があらば幸の至である。

(大正十五年七月二十一日夜稿)